

崩壊か再生か

新しい力の源を求めて……………'81コー世界大会テーマ

本年も七月から八月にかけてスイスのコーではMRA世界会議が開催された。

『崩壊か再生か』新しい力の源を求めて、というメインテーマの下にアジア太平洋会議、青年会議、家族のための会議、アフリカ二十ヶ国から百二十名余りが参加したアフリカ会議、政治家会議、そして日本から五十名余の参加した産業人会議などが開かれ、山積する世界の諸問題に解答を見出すために、真剣な話し合いがなされた。民社党竹本孫一衆議院議員御夫妻の出席とその積極的な発言の数々、今年で五回目の訪問となる高瀬顧問を初めとする東芝労使代表による率直な日本の立場の表明も、貿易摩擦に苦悩する欧州と日本の理解のギャップを埋める大きな役割を果たしたと言えよう。過去五年日本で開催してきたMRA国際会議に参加した海外代表も多数コーに集まり、日本代表と旧交を暖めた。『ここコーでは本場の国際チームワークが体现されている』と言った通訳の言葉が実感として受けとめられる。参加者の何名かからその体験を報告して頂いた。

道徳再武装推進のために 竹本孫一

◇狂気の時代◇

核武装が今米ソの間で激烈に斗われている。広島の前百三十万倍の核をもつてしても猶足らずとする深刻さである。八億の人間がこの地上で飢えに泣いているのをよそに、毎年五〇〇億ドル以上の軍事費が使われている。

核戦争には勝負はない。地域限定もあり得ない。正にアトリー元英労働党党主の云った通り狂気の時代である。

レーガンの強気外交に押しまわられて、日本はどこまでゆくの心配だ。国は守らなければならないが、守り方は外交が基本で、経済、軍備がこれに次ぐ。総合安全保障となれば核軍縮こそ当面緊急の第一の課題である。

道徳再武装の必要な所以である。

(裏へ続く)

- モスクワの理論, ジンバブエの真実 ニューワールドニュース
- 関西MRA大会レポート
- 世界のセンターめぐりV……………フランス

◇ハードスケジュール◇

私は二〇年振りにスイスのコーを訪れ、いろいろの会議に参加して、まことに有難い勉強をした。前回は故片山哲先生のお伴をして一寸立寄った程度で、

「アジアの燈台に」と言う言葉以外に記憶はない。今回は八月十八日から二十五日まで実に充実した一週間を持った。初めは家内とマウンテンハウスでゆっくり休養する予定だったが、十九日から合計四回の発言の機会を与えられ、朝昼晩の三回の食事も初めての外国人との会食で緊張そのものやりとりであった。予算委員会や大蔵委員会以上のハードスケジュールであったが、これ程充実した楽しい夏休みは初めての経験であった。特に感銘を受けた点を述べよう。

第一に、静かな時間 (Quiet time) を持たなければならぬことを教えられた。忙しいとは心を失うと書くが、多忙な毎日を送っている政治家や実業家が心を取り戻し、良心の声を聞き、神の呼びかけを聞くための時間である。われわれには、反省もなく、瞑想もなく、偶にきけば「野性の呼び聲」(The call of wild) 位で、これでは汚職、独裁、軍国主義、過当競争、保

護主義も必然である。神の声をきき、職業 (Calling) に神から授かった使命を感じつつ、真の平和 (Peace) と進歩 (Progress) と繁栄 (Prosperity) のためにつくしたいものだ。

第二に、知ることは愛することであるとの実感を持った。英・米・独・仏はもち論、インド・ラオス・タンザニア・ナミビア・エチオピア・スウェーデン・ノルウェー・スイス・オランダ等、白人も黒人も黄色人種も、国境を越え、人種を越え、イデオロギーを乗り越えて、一堂に会し、同じカマのメシを食べることは、本当に心と心のふれ合いを感じざるを得ない。ルーマニア国王、同王妃とタンザニア・インドの代表等と共に、テーブルを囲んだ夕もあった。

話してみれば皆同じ人間だといづく感じた。満州の友人が戦争中、「世界人間連盟」を作りたいと云っていたことを思い出した。

心の中に平和の砦を築くためには、先ずお互いがお互いを知りかつ愛さねばならぬと想う。

第三は、知識、情報の交換の重要性である。

私はフランス保守党の政治家から、ジスカールデスタンの対

ソ外交の背景をきいた。ミッテラン国有化への危機感もきいた。ドイツの産業者からは、この一年間におけるドイツ経済の悲劇的変貌について詳しくきいた。彼は私がアメリカの高金利、強いドルの悪影響について批判したとき、ドイツの最近の貿易はマルク安で大変な黒字になると喜んでくれた。

英国の議員さんは、父は労働党の有力幹部で自分は保守党だ、選挙区は隣りでやっていると言っていた。彼はアイルランド問題について、「英国人は何も思いつかない、アイルランド人は何も忘れない」と云う諺を引用した。彼は労働党左派の EC 脱退論はグレート・ミステークだと評し、私も同感した。インドのガンジーのお孫さんからは対ソ・対中共政策について面白い話を聞いた。オランダでは原子力発電の是非を国民投票にかけたが、その際賛成、反対の外に二〇一〇年までの間に他のエネルギーが開発されるまで暫定的に賛成、と云う項を設けたと云う話をきいて参考になった。アフリカ諸国の民族開放への熱願には感動した。ラオスの元駐日大使とじっくり話した時、難民のきびしい斗いに家内は遂に涙

した。ジンバブエの元蔵相からは、援助の金につながる汚職もあるとの話まで聞いた。

ブランド報告で有名な英のマッケンジー氏とは度々懇談したが、新カント派哲学についてまで論じあった。B・コナー氏からは流石に中東問題の権威らしい意見を聞かされた。

私は

"Inflation as a moral issue"

と云うインフレの捉え方が特に気に入った。昨年の総選挙の時、財政再建は要するに道義の再建から始まる。ごねる、ねだる、おもねるの三ねる主義では財政は破綻するだけである、と訴えた私にピッタリときた。

アメリカ婦人の消費抑制論にも共感するものがあった。私はフルシチョフがかつて、経済の根本は共産主義といえども、勤儉貯蓄の外にはない、と演説したことに言及した。

生産にも、消費にも、神から与えられた使命だと云う厳肅なる使命感が必要なのではないか。

◇人生最大の喜び◇

帰途ロンドン空港で、トランクが行方不明となりあわてたが、山崎公使や吉村書記官のご努力で翌日間に合うように手にもどった。

ロンドンでは MRA のマイク・スミス氏から電話があったので、公使に誘われてセント・コランバ教会に伺った後、家内と二人で訪問した。アメリカの大学教授、シェークスピアの劇をやったと云う女優さん、ジンバブエ及びカナダの友人と楽しく屋近くまで懇談した。彼らは相馬さんが間もなく見えること、来週参議員の田氏が来訪されると楽しみに待っている様子だった。名通訳をしてもらった藤田氏夫妻はその後になるらしい。

今回は、パリ・ローザンヌ・マウンテンハウス・ジュネーブ・ウィーン・ロンドンと十八日間楽しくも有益な旅を、家内と共に持つことが出来て感謝である。

MRA のような国際的なつながりが広く、しかも道義的で内面性の豊かな組織を知ったことは、わが人生最大の喜びである。なるべきものにならんがために私は MRA 運動に積極的に参加協力したいと希っている。

すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、主を求めよ、正義を求めよ、謙遜を求めよ。(ゼバニヤ書二一三)

衆議院議員民社党
政策ビジョン委員長

MRA世界大会に参加して

見村聖一

◇マウンテンハウス◇

八月二十一日(金)午後九時、私達一行の乗ったジャンボ機が夜空に吸込まれていった。

目差すはスイスです。ヨーロッパの旅は初めてなので期待と不安の交差した複雑な気持ちでした。機内ではなかなか休むことが出来ず、眠り薬で口を潤すことにしました。一杯飲みほすころには、気持ちも落ち着き深い眠りに入ることが出来ました。

まもなくジュネーブ空港に着陸すると、のアナウンスがあり、窓の外にはエメラルドグリンのレマン湖が見えて来ました。

スイスの街は美しい花が咲き乱れ、おとぎの国に足を踏み入れたかのような、そんな美しさに感激しました。

私達がMRAハウスに到着すると、日本MRAの皆様はじめて世界各国の皆様が明るい笑顔で、明るく暖かく迎えて下さいました。私達もホッと心がなごみしました。MRAの皆様の心のやさしさ、暖かかというものが早、伝

わって来ます。私達はMRA世界大会に五日間参加しまして、

世界各国の人々と色々お話しすることが出来ました。食事やミーティングなどを通じて沢山の人が人と接触し、多くの事を学ぶことが出来ました。

◇済みませんの一言◇

ある朝のミーティングでこんな話がありました。「あいつが悪いと人を指さすと三本の指が私にさし向けられているのです。

だから相手より自分の方が三倍も悪いかもしれない。自分は良いと思っても神様ではないから、一つ位間違いをしているかもしれない。にもかかわらず、相手は自分より十倍も悪いじゃないかと非難する。あいつより良いと思っている自分からそのたった一つの悪い点を相手より先に『済みません』と謝まる

ことが十倍も悪いと思われる相手に変わる機会を与えることになる。友人も家庭も世界も自分が変わり始めるとき、なごやかな平和が生まれる。この地球上に

人が住む限り争いの絶える日はないでしょう。『済みません』という一言が人を結びつける言葉であり、やさしさである。人類が平和に暮らすかどうかは、人の心が変わるかどうにかかっている。』という話でした。

やはり、変わろうと努力する人が勇気を持ち、協力することそれが悪の集団に勝つ秘訣だと思います。そして、今、それが人類が直面している課題であり、これから世界はますます狭くなり世界中の民族が肩を寄せ合って生きていくような時代にそれが必要であると思います。

◇四つの標準◇

また、絶対正直・絶対純潔・絶対無私・絶対愛という四つのMRA精神は、フランク、ブックマンにより提唱されたと聞きました。「人の世には当然のことながら、善意と悪意とがあり、善意は人々の幸せを創造する。国や民族・宗教や階級の相違は大きな問題ではない。問題は『善いことは良いこと、悪いことは悪いこと』という簡単なことが

自分に都合よく理由づけされ争われていることである。個人や集団のなかの悪意を、善意に変える努力をしなければならぬ。個人も集団もより良い生き方、

やり方を見ると変わることが出来る。』そういう考えから、人がより良く生きるための道しるべにしようと、四つの道徳標準をかかげたという。

私は四つの事柄を自分自分に問いかけてみました。すると、返ってくる答えはすべて「NO」/という言葉ばかりです。うそをついたこともあり。心も純潔とはいえません。常に自分中心に物事を考えていました。すべての人、物に対して愛情を持って接していたとはいえません。その時、とても心が痛みました。しかし、これからは、四つの精神を目標に今までの自分の悪かったところを直してゆきます。

◇日本に帰って◇

MRA世界大会に参加してから、一カ月が過ぎようとしておりますが、「絶対正直」「絶対純潔」「絶対無私」「絶対愛」の精神は私の心に強く焼きついていてます。MRAに参加し、貴重な経験をさせて頂き、ありがとうございます。これからの仕事において、又、人生において、MRAで学んだ多くのものを実践してまいります。

最後に、今回のMRA会議に参加させて頂くに当りまして、

相馬先生、榊先生をはじめ、MRA日本協会の皆様には、色々とお世話になりましたこと、ここに厚く御礼申し上げます。今後ともよろしく御指導下さいませよう、あわせてお願い申し上げます。(株)ハンサム



●コーの全体会議で意見を発表する見村さん



◇究極の目的◇

何を学んでも、そしてどんなに知識を得ても活かさなければ、ただ「雑学コーナー」という心の本棚にしまわれっぱなしで、その人の知識欲を満たし、単に経験したという思い出になるだけにすぎないでしょう。

私がコーで体験し、目にし、触れた事は自分の人生の中での特ニングポイントになったのでした。

「人種」。この表現は生物学的に肌の色の違い、又出生した地域によって決められたワクにすぎないが、「生活文化習慣」これは人々がすべて与えられ吸収した条件の違いであり、これをすべてゼロにすることは不可能です。しかし、その人種と文化の差異を超えて、人と人とが心から語り、笑い、許しあう。

多くの宗教が究極の目的とする「理想郷」に近い場所がこのコーであったのです。

さらにこの空間が始めからあったものでなく、ひとりひとり力強い信念と行動によって、なるべくしてなったものだ聞いて、本当に驚きました。特に、自分の行動理念を個人の良心に問い素直に耳を傾け、その目を最高の一日につくりあげてゆく

マウンテンハウスは私にとって何だったのか



という積極的な生き方そのものであります。

私も学生時代、自由な時間にもかかわらずいくつかの宗教集会に出たことがあります。

どれも自分にとって不自然に思われ、次回話を聴く必要なしという結論に至ったのでした。軽率な性格の自分でありました。でも、もっと深く知ったうえの判断を下しても遅くなかったのかも知れないと反省しています。

◇魂の力◇

今、日本に帰って毎日をあわただしげに送っている状態です。仕事のみに流されてはいけな思っています。仕事に対しては何を今自分が行なえば業務成績が向上し喜ばれるのかと



蓬田隆

いう心構えでとり組んでいるつもりです。しかし主体が自分であるだけに客観的に反省できないという弱い側面があります。

そのためには、上司あるいは同輩の人に意見を伺う事を意識しております。それによって修正してゆければと思っています。が、いざ核心をついた所はまともに聞き入れない自分に、心の狭い「自分だけは」という気持ちを見るのです。社会人になって三年、学生気分の抜けきっていない点があります。やっかいな事はしたがらず、個人的責任を

さげ、周囲の者にまかせたがりです。言葉をかえれば、生活を守るのも、遠くの貧困者に援助の手を差し伸べるのも政府・国

家に委ねているのです。

コーで会えた人たちは、実に多彩な職業や地位にある方々でしたが、皆、個々の発想の転換や体験などを話し合い、今後の社会で何が必要とされるかというディスカッションをしています。今まで世界や日本の立場、情勢はおろか自分自身さえ知らずに生きてきた事を教えられました。深い思いやりを持った人がイデオロギーを超えた時点で、静かにそして熱っぽく話してくれました。現代における価値感の多様化とともに、政治宗教や社会運動のトップが必死になつて口角あわを飛ばしながら論じあつても、事態は思うように進展していません。インドのガンジーは「魂の力」と、非暴力の強い信念で社会的改革をなしてゆきました。自分の社会または政治に対して変革を求めるなら、自分自身から変えてゆく行動を取らなければならぬと、今強く心を新たにさせられています。

そして同じような意識を持つた人が、考え方を確認し合いながら増え続け、最後に結びついた時、自分を含む社会の大きな進歩であると思います。

◇行動◇

「行動」。私の場合、確かに一日の大半を仕事の時間が占めています。だからといって消極的に流されるのではなく、また単に盲目的に生きがいとするのでもなく、大きな変革のための過程として今見つめなおし、自分の人生の中の生きがいと言いつける仕事にしようと思えます。行動とは自分の健康管理からスタートし、家族間や仕事に関係する人間のコミュニケーションをすばらしいものに創りあげる私の出来る範囲の行動です。同時に、相手の事も世界の流れもどのように自分と関連しているか知らなければならぬと思えます。単なる勝ち負けではなく、大きなつながりの中でどのように生きて行くことが調和的であると言えるのか努力するつもりです。

最後に、マウンテンハウスでお世話になった方々、機会を与えて下さった神先生はじめ社内の方々へは感謝の気持ち一杯です。

(株)ハンサム



◇産業人会議◇

八月二十五日から三十日の六日間にかけて、スイスのコーで開催された産業人会議に出席する機会を与えられたことを感謝しています。たまたま私達一行はコーへの参加の前に、世界各国で働く仲間を訪問し、激励する旅を続けた後であり、コーで話し合いの实感もより心の中に残るものでした。コーへ到着する前に訪れた国は、シンガポール、スリランカ、バーレーン、エジプト、ギリシャ、ユーゴスラビア、西ベルリン、東独、英国、フランスで、一部分ではあるが、東南アジア、中近東、東欧、西欧と国情、環境の違いも多岐に渡っていたことも幸いしたと思います。六日間の短い期間であり、言葉その他で知識のない私でも無事参加出来たことは、コーに集まった皆様と、役員の皆様のMRA精神のためものに他ならないと思っています。

産業人会議のメインテーマは「経済危機——変革の好機」でした。経済危機への直面、貧困、不信、暴力、そして戦争とさまざまな不幸が起きています。国、人種、立場をこえて、どの様にしてこの世界を変えるかに立ち向かおうとしていました。それ

は、はかりしれない大きな夢を現実にもどそうとしている姿と受けとれました。参加した私自身にこのはかり知れない大きなテーマの中で何がなせるのか、疑問であり不安でした。その中で私自身がなした事は一つです。それは、相手の立場に立ち、相手を知ること、大きな意義があるのではないかを知ったこ



小さなものさし

コーでの六日間

仙洞田 修

すぎ、多くのものがくずれ去った。人間の気持から始まるべきだった。マルクス・レーニン主義はバラ色のみを与えそれを求めた人人には全てがくずれたものが残った。現状が続いたらさらに不幸が続く。国の安定と、平和に対し、イデオロギーでは答は出ない。」

とだと思っています。

◇未来への忠告◇

会議の中で基調講演から、私の印象に残ったいくつかの言葉をごにまとめてみました。これらの言葉は過去の多くの反省であり、未来へ向けての忠告であると思います。「アフリカ大陸での投資は危険があった。私どもは多くを求め

「ヨーロッパの危機の原因は人にある。健全な心でやれば、良くなる。」

危機はお互いにくしくみあっているからだ。誰が正しくて、誰かが間違っている。自分が一番いいのだから。自分を変えるべきだ。危機が提供する機会を大切にしよう。

変革の機会に産業が大きな役割を持つと、変革は人々のそれぞれから出発しなければならぬ。

数字にのみ発展を見ているがため心がおざりになっている。未開発は心の開発にある。

小さいことは美しい。なぐさめられるより、なぐさめなさい。繁栄は人類の全て。違いはあっても共通な声でやれば出来る。

第三世界は我々の知識を必要としている。相互信頼が欠けており、期待が大きすぎ戦争が起きた。パートナーシップは既存の考えを捨て、相手のことを考えることだ。将来に向って共に築くことであり、小さな野望を捨て進むことだ。」

これらの多くの底に流れる共通点は「非利己的」にあると考えます。素晴らしいことだと思いが、私自身にとってみれば、いつ行きつける言葉か途方にくれているのが現実でした。

◇私にとってのコー◇

日本から、多くの人々が参加し、そしてその感想は、世界の目が我が国に注がれていることでした。この注目される現実、我が国を知ってもらうための機会だとも思います。勤勉な国民であり、組織の考えが個人の考

えを先行させる風土なりは知ってもらいたいポイントだと思われ、組織の考えが先行されるということは、相手の立場に立つて考えるというMRA精神に通じるものではないでしょうか。私達の紹介した日本で行なわれているいくつかの方法に対し、「信じられない」「理解しがたい」といった感じが相手の表情にうかがわれました。いま世界は経済危機、先進諸国の貿易問題、発展途上国の民の貧困などをとってても一國で解決出来ない問題ばかりであり、早急な改善の為には、お互いの実情を十分に話し合い、お互いが理解し合いながら、諸問題を平和に解決していく必要があると思えます。我が国を知ってもらうために、世界諸国の風土、実情を知ることが同時に行なわなければならないはず。MRAの会議はこの為に大きな役割を果たす場であると確信が出来るし多くの国の多くの人が身近に自分の心を開いて話している姿から、十分にそれが感じられました。

「労組からみた経営」との題で組合の立場から労使関係について発表しパネラーもつとめたこと (裏に続く)

とも私にとっては思いもよらぬ
貴重な体験でした。

質問の手も多くあがり、時間の都合で打切らざるをえなかったことも一つの驚きでもあり、我が国の立場の重要な位置づけを知る一幕であったと思います。ほんの一端ではあるが、我が国を知っていただく一助になったことを幸いにも思いました。

私自身のコーでの一つの大きな収穫は、自身のものさしをかえることが出来たのではないかと思っています。生まれてからの人生を国内の一地域で過した私にとってのものさしは、小さなものさしであったと思うし、ややもすると自己中心になりがちなものさしは、やはり小さな物であったと思います。コー

で感じたものは、自分の小さなものさしでは測り切れないものを感じ反省させられました。相手の立場に立って物事を考えるにはもっと大きなものさしが必要になってくるはずですし、反省と同時に大きな収穫でした。反省させられた点のもう一つは、言葉の弊害です。もし私が英語を自由に使いこなすことが出来たら、収穫はさらに大きなものとなっていたはずですが、言葉さえ自由に使えたら、自分の意志

を十倍も表現出来、十倍も我々自身を知ってもらい、十倍もの知識を集った多くの人から得ることが出来たはずですが。

今年も東芝から五人がお世話になりました。過去にも多くの先輩がお世話になり、組合からも毎年数名の幹部が次々にMRA会議に参加し、誰が良いか悪いかでなく、何が正しいかの理念を学びとって帰り、その理念は組合運動の底に流れています。組合運動を大きく変化させたことは大きな収穫であり、今後多く多くの東芝の人々がお世話になると思います。変わらぬお世話をお願いいたします。

コーをつつむ自然は美しかった。それに調和するかのごとく、内にみなぎる奉仕の精神が、コーの美しさをさらにきわだてていたように思い、滞在中お世話になった方々にあらためて感謝申し上げます。

東芝労組横須賀支部
執行委員長



八月二十一日より二週間MRAヨーロッパツアーに参加する機会を与えられて感謝しています。念願のスイスの山々、そして北欧の風景をこの目でたしかめ長年の夢を実現することが出来ました。コーでの生活は十日間でしたが初めての参加で新鮮な刺激を受けました。会議では約六百名の様々な環境や年代の異なる世界中の人々と寝食を共にし、これまで知らなかった世界を直接見聞し、多くの友人とそれぞれ信仰のあり方や心の深さにふれて物の見方も考え方も大きく変わった様に思えます。自己を失うことなく相手を理解し共に協力し眼を大きく外側に向けていけるようになりたいと思います。この気持ちをいつまでも忘れないように東京に帰ってからも続きますようにと念じております。多くの友人と今後もありを深めていきたいと思っております。

この様に大会が順調に運営されるのは目に見えない場所御奉仕される方々の御苦勞のおかげと心から感謝いたします。

コーはレマン湖やアルプスが望める最高の場所でした。澄みきった空の下、山道でオランダのヴァンダジーさんや柴田節子

さんと野草を沢山つんでルームメイトに活けてあげました。また日本の夕べで、台湾、インド、フィリピンの友人たちに心よく手伝って戴き盛會に終えられたことなどを思い出します。

ナイジェリアの方が全学連の事等日本の事情をよく知っているのに驚きました。又、あいさ

初めてのヨーロッパ

小門八重子



と白を基調とした建物で、緑の中でとてもきれいでした。博物館のように色々めずらしいものが置いてありました。御庭ではお茶をいただきながら丁度お国の事情を聞かせていただきました。ロンドンではMRAの劇場、ウェストミンスタール

つには日本語を使ってくれました。

コーで知り合った多くの友人たちとの思い出と共にコーに別れを告げ、次の訪問地パリに向いました。ブローニユの森を通りながら、フト佐伯祐三という天才画家の事を考えていました。フランスのMRAハウスはグレ

しても思われた国に居ることを感謝しなければと思いました。MRAハウスではクレアさんと二年振りに再会出来ました。夕食に出た鹿肉とか手作りのジャム、漬物又アイスクリームのおいしかった事。夜は暖炉の前でお話しをしながら北欧の夜を満喫しました。

山紫水明のスイス、活動的なパリ、重厚なロンドン、白夜のオスロ、沢山の友人を得ることが出来感謝の気持で一杯です。

● 紳さん(右端)に引率された今回のMRAヨーロッパツアー参加者



御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連携のもと諸般の活動を行っており。毎年開催される国際産業人会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせていただきます。

一、会費

- 個人(特別) 月額 一〇〇〇〇円
- 個人 一〇〇〇〇円
- 法人 一〇五〇〇〇円
- (共に年額)

一、払込先

- 第一勧業銀行代々木支店 (普) 一六三一〇一四 三三六
- 住友銀行新宿西口支店 (普) 二五九一四一八三 七九
- 富士銀行動坂支店 (普) 八六一二二〇〇
- 国際MRA日本協会宛

九月二十六日六本木国際文化会館

私達一人一人が確信を……

去る九月二十六日、東京の国際文化会館において一九八一年MRA世界大会に出席した代表の報告を兼ねて国際MRA日本協会の第六回総会が開かれた。柳沢錬造理事長の挨拶に引き続き、昭和五十五年度の事業報告、会計報告、監査報告及五十六年度の事業計画が報告され、承認された。

続いて、コー世界大会参加者の報告に移り、それぞれの体験そして確信が披露された。浦和から十名のグループを引率された榊たか子埼玉県会議員は、「確信を持った人が三、四人いれば何でも出来る」という言葉に啓発され、「自分もその確信を持てる一人にならなければならない」と述べられた。このグループに同行した若い光武孝文君は「絶対無私」という言葉を自分の言葉として一生大事にしていきたい」と語り、同じく高橋浩子さんは、「人に甘えがちな自分自身から先ず変え、MRAの精神をもち、もっと世界に眼を向けられる人間になりたい」と述べた。今年で五年連続労使の代表を送り続けている東芝の高瀬顧問は、「スイスでの対話や、そこへの往復の間の労使代表のスキップを通して信頼関係が高められた。又、コーで学んだ『誰が正しいかでなくて何が正しいか』という考え方が労使双方の考え方の基調になり、爾来ストライキがなくなった」と述べられた。同時に本年の労使の代表の上遠野、仙洞田、谷川の諸氏からそれぞれの感想が話された。世界経済調査会の西村常任理事は、「混迷する世界情勢の中で、コーに世界の数百人の人達が親しく、或いは親しくなろうとして率直に話し合っている姿に一つの灯を見たような気がする。この空気をどのように世界にみながらせればよいのかを考えさせられた」と述べられた。最後に今年のコー大会を総括して、相馬雪香常任理事は、「日本の代表が沢山参加し、率直に話をしてくれ、世界の問題を共に考えられたことを感謝したい。もっと簡素な生活をして、アジア・アフリカのことを考えていくことが日本の生きるべき道であり、その点で世界をリードしていくべきだと思う。」と結んだ。

また、世界経済調査会の木内会長よりも「世界の中の日本の役割」についてお話頂いた。MRA九州協力会の代表を初めとし神戸、水戸、浦和など遠方からも参加頂き、閉会後も懇談の輪が広がった。



●高瀬東芝顧問



●確信を語る光武孝文さん

国際MRA日本協会 第6期収支表

自 昭和55年4月1日
至 昭和56年3月31日

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	213,729	行産業会費	7,664,728
年会費	1,155,000	動人信費	4,604,283
個人別費	1,240,000	会刷購入	1,296,762
法人別費	4,350,000	書購会	837,700
MRAハウズ	6,239,638	集家事務	123,092
寄付金	1,909,724	所費(雑費)	105,840
個人別費	510,000	生費	1,521,969
議費	3,872,882	度緑	1,481,969
上子入	36,000	厚飯次	90,480
会売利	105,167	年	116,410
収	16,441	度	1,875,348
雑	70,000	計	
計	19,718,581	計	19,718,581



春日屋蓉子

第5回フランスMRAセンター

◇第一印象◇

私が、フランスはブローニュにある瀟洒なMRAハウスに約一ヶ月滞在させていただいてから、早いことに二年がたちました。

ドゴール空港に私と亀田佳枝エさんを迎えに来て下さったテイト氏の車に乗って、初めて私がこのハウスを見た時の印象からお話します。

空港から三十分余車を飛ばすと、それまでの風景からまた一段と緑深いマロニエの並木に面してアイポリホワイトの三階屋が、まるで長旅をいたわってくれるかのように優しくたたずんでおりました。この家に住む人の正しい生き方がにじみ出てくるような、清潔で威厳のある雰囲気を感じながら、ハウスを見上げた時の気持ちを含めてもなつかしく思い出します。

◇ハウスでの生活◇

ハウスでの生活は、朝七時起床、(パリの七時はまだ暗いのです)朝食を済ましてから全員がその日一日のスケジュールを相談します。私は滞在期間が短いので、日によってパリ見学をさせていただきましたが、それでもMRAのオフィスの手伝いや、庭の大掃除、食事当番とまさに

みんなと同じに扱っていただきました。今思ってみても、MRAのこともよく知らない初めての来訪者に、家族としての信頼を寄せてくれ、責任まで負わせて下さったことに深く胸を打たれます。一度ハウスの方達が一泊の旅行に出かけたのですが、一組のご夫妻と私が留守を守りましたが、こうしたことも日本では考えられないことでしょう。

また、よくお客様をお呼びして心のこもった(本当にMRA以上に心のこもったおもてなしというものを私は見たことがありません)お食事で夜を過ごすのですが、私にも二度程お料理をまかせていただきました。どんなお客様に対しても、質実であるという姿勢をくずさずそれでいてなかなか洒落たものでした。時によっては、庭のマロニエの葉をテーブルに散らしたりもいたしました。

夕食後は、テレビを見たり手紙を書いたり自由に過ごすのですが、日本でのあわただしい生活から比べるとゆったりゆったりと時間が流れて行くような毎日でした。四時頃になると、お茶とクッキーを池に面したバルコニーで楽しむのですが、そんなある日男の人から「今日は実に

忙しかったね。」と肩をポンとたたかれた時は、返す言葉がありませんでした。

◇世界家族◇

この短い文ではとても言い尽くす力が私にはありませんが、ここでの生活は、心が自然だったと強く思います。たとえば、ごく自然に東南アジアの難民の方達をお呼びして話をうかがい、みんなで今世界がかかえている問題に関わって行きます。こうしたことがあたりまえになされています。決して誰のことも特別扱いにはせずに、世界家族の一員として心を開いています。

私が初めて東南アジアの難民に出会ったのが、ここフランスのMRAハウスであり、世界が



かかえている問題が今一緒にいる隣人にふりかかっている、こうした社会を良くするのも悪くするのもまず自分の在り方だということを教えてくれたのが、二年前の夏でした。

ブローニュの並木道を歩いていると、マロニエの実が頭に落ちてくる晩夏に、MRAハウスを発ち日本に帰ってきましたが、このハウスでいろいろな方が根気よく私に教えて下さったMRA精神を充分に活かしていません。それでもまたいつの日かこのMRAハウスを訪れて、みんなからのチャレンジを受けながら生活したいと夢見る今日のごろです。



BRASSEL SIGIDI works with Bulawayo
City Council, Zimbabwe.

モスクワの理論 ジンバブエの真実

ブラッセル・シギディ(ジンバブエ)

これはイギリスのMRAニュース「NEW WORLD NEWS VOL.29 No.40」からの転載です。

あのローデシアがジンバブエとして生まれ変わるまでの苦しみを、文字どおり身をもって体験した一人の元ゲリラの真実が語られています。十数年間にわたる亡命生活と闘争の末につかんだ独立、しかし次々と襲ってくる新しい試練、そして挫折。これらの貴重な体験を通して筆者は真の意味での革命を私達に問いかけているのです。「革命とは制度でもなく、ただの理論でもない。君自身の中からはじまるのだ」と。

◇亡命生活◇

私はジンバブエ(旧ローデシア)が独立する以前の十四年間という長い間を亡命者として過ごしました。一七才の時、ザンビアに渡り祖国を解放する戦いに参加を望んだのですが、共産党は私を若すぎるといふ理由で高校へ送り、さらに戦いへの私の決意が認められず連に送られて教育を受けました。

ソ連ではマルクス主義・政治経済学・無神論そして発展途上国の問題を学びました。それらを優秀な成績で修めた私は軍事訓練を受け、着々と戦いの為の

準備がなされていったのです。アフリカへ帰り、ゲリラ活動の準備のため一年間を費やしたのちの手始めの仕事は、まずゲリラ活動家の中から戦いのさまたげとなる信仰なるものを一掃することでした。

ザンビアではマルクス主義の宣伝につとめました。やがて政治活動勢力の間に分裂がおこり、私達はマルクス・レーニン主義グループを結成しました。しかし私達は孤立し地下へと追いやられました。そこで私は偽名を使って大学で法律を学び、一年間弁護士として働きましたが、その間も私の政治に対する関心は衰えることはありませんでした。

マルクス・レーニン主義においては人種も階級であり、資本主義の代表でありブルジョワである白人は完全に打ちのめされ労働者階級が取ってかわらねばなりません。

ところがアフリカ人の指導者達の中にも、労働者階級の独裁を好まず、全てが現状のままであることを望む者がいたのでした。私達の仲間の中にいる資本主義者やブルジョワ達を打ち倒すことが私達の次の戦いでした。しかし私はこの戦いを次々と

求めていくやり方に次第に矛盾を感じて来たのでした。

第一に人々は戦いより平和を求めていること、第二に私の国の状況にマルクス・レーニン主義が一体どう役に立つのかということです。人間は理論を行動に移して初めてその理論の中にある矛盾に気がつき、そしてその中のいくつかの理論が役に立たないことに気がつくのです。

マルクス主義に固執する空論家達が暴力を唱えている間にもMRAは人々の間に和解をもたらすはじめたのです。私はその時の我国の状態にもっとも役に立つと思われたMRAの考えを受け入れる決心をしました。

◇和解◇

“和解”特に人種間の和解は大変重要です。

さて新生ジンバブエに帰った当時の私は、過去のつらい経験、そして人を憎むことを教え込まれたせいで白人に対して憎しみで一杯でした。市議会の私の部署には当時たった二人しか黒人はおらず、私はそこで自らを困難な状況に追い込んでしまったのです。

白人達にとって黒人と平等に働くのはこれが初めてのことです。彼らにしてみればそれは今だに

主従関係であったのです。それに腹を立てた私は彼らとはいっさい口をきかず、すべて使いの者を使って仕事をしていました。タイピスト達は今だにアフリカ人は劣っていると考えていて、私の手紙を勝手に変えたり私を上司として受け入れようとはしませんでした。こうして私は現実には失望していきましました。ちょうどそんな頃、ジンバブエの夜明け”というMRAの映画に私は招待をうけました。映画の中でアーサー・カナデリカという黒人牧師の“人間を憎むことによってその人を変えることは出来ない、その人をもっと悪くしてしまうだけである、だからもしあなたが悪いと感じるならあやまらなければならぬ”という言葉に非常に感銘をうけました。

私の職場のとげとげしい関係の原因の一つは私であることに気がつきました。早速私はタイピストの一人にあやまってみしました。すると彼女は私の所に話し、それ以後彼らは私の所に使いを送るかわりに自分達で仕事を確認しに来るようになりました。

一方国内では部族間の争いが各地で頻発し、毎日多くの人が

が殺され政治家の責任のがれのために入々は混乱におちていました。私達は人々と共に何が争いの原因かを探り、そしてどうすればそれを解決出来るのかを話し合いました。

大部分の人は政治家達が無責任な発言で人々を扇動し、他の党の非難ばかりしていると考えていました。これらの指導者達が和解という点で団結しそれを大衆に伝えることが大切であるとの結論に至りました。私達はこれを「統一はあなたから始める」という宣誓書としてまとめ首都ソールズベリーに持って行き、各党や政府の指導者達に面会しました。

その結果、しばらくのち各党の代表者達が争いの起っていた各地で共同声明を発表し団結を国民にうったえたのです。その時私は常に神の指示を求め私が必要とされる限りMRAの為に働く決心をしたのです。



(終)

関西MRA大会 10月3・4日

今年もまたこの会を開くことが出来て感謝にたえません。運営にも馴れたせいか厳しいなかにもお互に暖かく気持が通じあい、若い人の積極的な活躍もあって昨年にもまして充実した集りとなりました。

数人の方に印象記を書いて頂き、それをオムニバス型式で皆さまへのご報告とさせていただきます。

(Y・S)

例年会場となっている住友住吉研修所のジャリ道歩きに私は、なつかしさと共にMRAを語るにふさわしい静けさにつつまれて一瞬緊張を覚えた。七十名程の出席者が揃ったところで開会、住友さんより「私達みんなが主役であり、心を聞いて話し合って実りの多い会にしましょう」との呼びかけで全体会議が始った。

若い方の率直な体験の発表、東京の寒河江さんの二十一世紀への警告、続いて沖田さん御夫妻の夫婦間に於けるMRAの実践記録が報告された時、それまで堅苦しさの取れなかった会議の雰囲気ガラリと明るなものになった。日頃より実践の人沖田さんの意外なる側面を拝見した思いである。参議院議員の柳沢錬造さんが世界の貧困について報告され、「自分の在り方が国の在り方で自分が変わることが国が変わることです」と結ばれた。最後にインドシナ難民を助ける会の相馬さんが、「現在の日本の繁栄に感謝する一方アジアの貧困を忘れてはならない。私達はいま何を成すべきか、重大な選択の時にある」と、実践者としての考えを述べられ全体会議も大きな高まりを見せて終了

した。

夜九時以降これも恒例であるが、夜に強い若者十名程がラウンジに集い、エチオピア難民のダムトーさんと語り合った。マスコミで報道される以上の彼の報告は、彼の立場に立って心の痛みを理解してやろうなどという私共の同情も吹き飛ばされる痛ましいものであった。帰る国なく、明日の保障もなく、家族と生き別れ安住の地がないとは何と悲しいことか。平和の尊さを聞く者一同痛感した。

私共は身近かな人に思いを寄せるように、遠い異国の人にも、思いをはせることを学んだ。

翌十月四日、まとめの全体会議で初めての方々から多くの貴重な意見を聞くことが出来た。今後、関西MRAの活動方針に生かされていくことと思う。短いスピーチではあったが、東京の中嶋さんが、「キラキラ輝く人生を築けるような人間になるうではありませんか」と言われた言葉は、中嶋さん自身の生きざまを象徴しているようで、その姿をまぶしく感じたのは私一人であつたらうか。

二日間の総括として、兼松さんが、韓国MRAに招かれ、高校生への歌う「統一こそ我が願い」

「朝鮮はどこに行くのか」を印象深く聞いて、次の様に提案されたという。「韓国の行くべき道は、アジアの目差す、いや世界の目差すべき道である。そこに目を向けた時初めて韓国の進むべき道がわかるでしょう。これがあなた方へのお願いです」私共は、常に他人に関心をもちひいては世界の人々に関心をもつて行動する必要がある。

それは四つの道義標準に基づく行動である。(T・I氏)

■MRAとは、この世界は人によって支配されるのではなく、神に支配された人々によって、世界の誤りを正すためにある。

今回の大会を終えて、MRAとは戦いだと思えました。自分との、そして世界にある正しくないことを正すための戦いだと思えました。一人一人が決心すること、そこからすべてが始まります。柴田さんのお話しが印象的でした。ある朝、柴田さんが持ったガイダンスは、受け取っていた失業保険を返すということでした。次の仕事を捜している、働く気持ちのある者のみに支払われるはずの失業保険を、働くつもりもなかったのに受け取っていたからです。このガイ

ダンスを持った時に、これは自分の考えを越えていると思ったそうです。なぜならば、今までみんなもしていることだし、悪いと思っただけでもなかったからです。ガイダンスを持って次にするべきことは、そのガイダンスに従うことです。

柴田さんは受け取ってはもらえませんが、お金を返しにいかれました。

相馬雪香さんは、ガイダンスをわかりやすく、次の五つの項目で説明して下さいました。

一、感謝すること、二、反省することはないか考える、三、計画を立てる、四、世界の情勢を考える、五、自分がケアーできる人はいないかを考える。

私にも経験がありますが、ガイダンスを持つと、自分が怒る前に謝らなければならぬことがあるのに気がつきます。日常生活の中で、一見些細なことが神からチャンスを与えられたための準備なのです。チャンスが与えられた時に、使われるに足る人間でありたいと思います。

(M・Tさん)

■つまり人生ではなかったかと反省している。ガイダンスを持ったつもり、チェンジしたつもり、ではダメ、本物をしっかりと

実践しなくては「藤田幸久さんのお母さん彰子さんのひとこと」がとても印象的でした。

エチオピアから逸れ神戸で自動車修理工として働いているダムトウ君を囲んで深夜まで話し合いました。「父は殺され、手紙が届かないので母や妹の消息が判らない、多数の子供が機関銃で抹殺された」など涙ぐんで語る彼に心が痛み、今どきこんな事が許されて良いのかと強い怒りがこみ上げました。

大会の翌々日にサダト大統領暗殺の訃報が伝わりました。

「チェンジによって家庭に融合をもたらすこと、これは世の中を正す原点で、是れ実践してほしいが、それで満足してはダメ、世界は実に急テンポで変化している。二十一世紀には希望をもてないと云う人も居る。日本の進路を正し、世界に平和と希望をもたらすために一人一人が何をなすべきか真剣に考えてほしい」と熱をこめて語られた柳沢錬造さんの言葉が生々しくよみがえって来ます。しっかりとガイダンスをもって、チームワークを組み、なすべきことを一つ一つ実践してゆきたいと決意を新たにしていきます。

(K・O氏)

■関西MRA大会に参加しての感想

大会のよい点

一、たいへんにアットホームなフレイク

二、会場の環境がよい

三、若い人の活躍

四、年令の中があった。

共鳴した言葉



戦争の禁止をするならば貧困を禁止しなければならない。自分のあり方が国のあり方なのだ。

一つ組織の長の質以上にその組織はよくならない。

■難民問題は二つの選択がある。(難民を) 宝にするか仇にするか

日本はアイラブミー王国だ
成熟した人は労ることを知った人

韓国人問題について

参会者の中の在日韓国人である山田さんが、自分の体験をこめて差別を訴えていた。

韓国人の問題は、歴史的な経緯もあり、隣国であり乍ら問題が多いし今もうまくいっていない。殊に在日韓国人問題は国策の犠牲者であるという意識もあり、日本の中の差別問題と結合しているのを避けて通れない。しかし日本人が直接韓国人から彼らの不満をきくことの出来るチャンスは仲々ない。彼等が日本人に心を開いて語ろうとしなからである。

山田さんが話をしたのはMRAを信じたからであろう。彼は安心して話をしていった。

山田さんがいった在日韓国人の入管の問題は、今国会で法的には前進しようだが、考えなければならぬのはむしろ彼らの心情的な面である。その意味でMRAの果たす役割があるように思う。

(C・Kさん)

■沖田幸治さんご夫妻の発表に大変感銘を深くいたしました。沖田さんが絶体の正直の尺度に

照らして、ご自分の行動を深く反省され、ある日、思い切って過去の間違いを心から奥様に謝られた。というお話しには、ほんとうに大きな感動と、心から共感を禁じ得ませんでした。理屈だけの説教に比べ、何とすばらしいお話しであったことでしょう。この感激は、おそらく、私だけではなかったでしょう。人間は、アダムとイブの昔から、過ちを犯す生物とされています。百パーセント完全な人間は神以外にある筈がありません。いつまでも過ちを隠したり、いつまでも他人を責めたり、恨んだりすることの非を悟らせて頂きました。

ブックマンの言葉に「憎しみより生れた平和はない」とあります。沖田さんご夫妻の今後のご発展を、心よりお祈りいたしたいと思います。(Y・I氏)



各国MRA国際会議のご案内

■青年会議

DEC.28.1981 — JAN.2.1982
ASIA/PACIFIC
YOUTH CONFERENCE

SHAPING
TOMORROW'S ASIA

at ASIA PLATEAU, Panchgani, India
the Asian centre for MORAL RE-ARMAMENT

「明日のアジアを築くために—
アジア・太平洋青年会議」
昭和56年12月28日〜昭和57年
1月2日
於 パンチガーニ、アジアア
ラト
地球時代の到来といわれるよ
うに世界はどんどん狭くなり、
国々の相互依存度はますます大
きくなっています。経済的・政
治的結びつきにとどまらない幅
広い国際チームワークの重要性
が増しています。そして、それ
はこれからの将来を担っていく
青年同志の間に殊に必要とされ
るでしょう。互いの国が何を必
要としているのかを知り合い、
共に助け合っていくための生き
方を、そして自らの国をより良
い国にするためのおのおのの役

割と責任を学ぶため、このアジ
ア・太平洋青年会議は開かれま
す。足許のアジアそして太平洋
をみつめ直し、この地域の将来
を共に考えていこうというもの
です。話し合いは勿論のこと、
スポーツや音楽・料理そして殖
林作業などを通して、各国よりの
青年との深い友情が培われるこ
とでしょう。なお、この青年会
議に引き続き一月三日より九日
にかけて同じ場所で開催される「
開発のための話し合いパートII
」への参加も歓迎致しま
す。

インド



■開発のための話し合いパートII



昭和57年1月3日
9日
於 パンチガーニ、
アジアアラト
昨年の暮から新年に
かけて開かれた会議に
は、先進国、発展途上
国、そして第四世界と
呼ばれる少数民族の代
表をも含めて三十二ヶ
国から三五十名の代表
が参加しました。今年
は特に中東から多数の
参加を促し、共に本当
の開発の意味を探り、
相互理解と信頼を築く
ことを目指しています。
それは、対話を中心
に、すでに決まりきった答
や頑な理論を述べ合う
ことでなく、体験の交
換を交えながら、お互
いから学びあうことを
主眼としています。

オーストラリア

■良識を呼び戻すための対話

昭和57年1月14日
19日
於 メルボルン大学
インターナシヨ
ナルハウス
産業、貧富の差、人
種、家庭及教育問題等
など、対症療法でなく
根本的な解決を求め
るにはどうしたらよいの
か、話し合いを通して
正しい共通認識を得、
何処を共に正していけ
ばよいかを探り、新し
い社会の方向付けをし
ていこうというのが、
この会議の目的です。

You are invited to be part of
a dialogue of common sense
on a new way of doing things

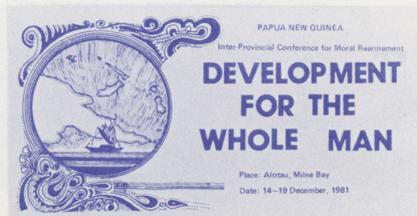
International House, University of Melbourne, Australia
14 — 19 January 1982

a forum convened by Moral Re-Armament

パプアニューギニア

■全人の開発を目差して

昭和56年12月14日
19日
於 ミルンベ
指導者そして普通の
人々が共に国造りをす
るための新しい精神を
見出すには、そして幸
せで健全な新しい生活
の型を築くにはどうす
ればよいのか、全体会
議、分科会、音楽ス
ポーツなどを通して探
っていきます。





連載 ②

人と機構

イエンツ・ウィルヘルムセン

◇南アフリカ

キリスト教の戒律の「愛」に對する解釈のまちがいがからキリスト教徒が、抑圧されている者の武力行使を不法として、直接、間接に抑圧者を支持してきたことは歴史に見られるところである。

とはいうものの武力に訴えることは、理論的にもまたよりよい手段を選べなかつたという点でも敗北である。南アフリカの状態を別にとろう。黒人は白人の望むにまかせていつまでも抑圧に耐えてはいられない。しかし、武装蜂起のつけはおそろしい。それはベトナム以上に世界を二分してしまふだろう。くすぶり続ける人種闘争の炎は、白人、黒人の別なく少数派をかかえる国ぐに燃え上がることで

あろう。その余波は合衆国の人種差別を悪化させるであろうし、

移民をかかえる英国のような国でも対立はより深刻になると思われる。人種対立は世界的にエスカレートし、第三次世界戦争に発展する可能性すらある。

しかし全人類のために南アフリカの黒人が自らの自由を捨てなければならぬのだろうか。そのようなことはできるはずのものではない。世界のどこであろうと自決の権利を抑圧することは誤りであり、それは戦争の可能性の源泉ともなり得る。

◇ラダー

しかし暴力にも勝るやり方がある。一九六一年に私は南アフリカ共和国でイギリスの劇作家ピーター・ハーワードの「ラダー」(はしご)という劇を見たこと

があった。その出演者たちは異なった人種ながら共通の目的をもった人たちであった。南アフリカの最高裁判所の裁判官やヨハネスブルグの過激な黒人指導者もいれば、ノーベル賞受賞者アルバート・ルツォーリが反逆罪に問われたときの政府側検察官だった人もいた。この彼が今ではすべての人種の背景をもつ人びとと同じステージに立っていたのである。配役の一人ひとり

が自分のなかにある優越感、憎しみ、恐れ、利己主義に気づいて、それらに対処した人たちであった。彼らは決して聖者ではない。しかし、人間の価値は皮膚の色にかかわらず平等であることを見出した人たちである。そしてこの体験を通して人間が変り得るという希望を持ち得たのである。それだけにとどまらず、このあまりにも得がたい体験を一人でも多くの人びとに知らせようと、誰とでも完全に平等な立場で働く決心をし、かつ実践しているのである。

スタンガー部落に私はルツォーリ族長を訪ね、「ラダー」の配役のリストを見せた。しばらく沈黙していた彼はこう言った。「これこそ希望だ。どうやっ

てこれをさらに広げていけるだろうか?」

その後南アフリカに起きた事態からして、こうした希望が幻想にすぎなかったという向きもあるかもしれない。しかし私が「ラダー」でみたものは問題解決の萌芽であり、より多くの人が手を貸せば必ず育つものであると信じている。「ラダー」の劇に係わりあった多くの人々は、きょうも根本的な、しかし暴力によらない変革をもたらすために人種の別なく働らく人びとの中核となっている。

南アフリカの明日を考えると、暴力以外に現状をくつがえす道がないとすると、将来の展望は暗いものとならざるを得ない。これは南アフリカに限ったことではない。我われはとかく人を動かす思想の力を過少評価しがちである。マハトマ・ガンジーがインド解放のために、大衆をひきつけた驚くべき大運動を展開したときもそれを過少評価した人が多かった。

「私の生き方そのものがメッセージだ」とガンジーは言い、何百万もの人びとが彼に従ったのである。西欧の我われはシニカルになつてゐる。我われは生命を賭け

た理想が失敗に帰するのをたびたび見てきた。シニズムが神を信ずる者の間にすら、はびこつてゐる。そのため期待はしほみ、我われの仕える神が変革をもたらす効果的な力になり得ることを信じなくなつてしまつた。

教会でさえ、暴力に訴える解放運動をすべきか、あるいはどの程度まで支援するのが適当かなどと論議している。答えは容易ではない。しかし、このような支持や暴力や反対への抵抗が教会の真の仕事にすりかわることは裏切りである。教会の本来の仕事とは人間の利己心・恐れ・憎しみと対峙し、それによつて暴力に代わる解決の可能性を切り開くことにある。

◇環境破壊

人びとが各自のやり方の間違いに直面したとき、一見解決不可能に思える社会的・政治的問題解決の糸口になることは充分証明するに足る。その幾つかは前章にあげた通りである。このような例証は暴力以外にもっと進んだ闘い方があると直感的に感じている人びとに希望を与える。

毛沢東は「権力は銃口から生まれる」と言った。しかし彼は新中国の建設に當つてこの種の

権力だけでは不十分だと悟ったに違いない。というのは彼は紅衛兵に向けて「反革命派に対して暴力や権力で戦ってもただ相手の肉体を傷つけるだけに終わってしまう。常識を用いるなら心にも影響を与えることができるだろう」と語っている。

現代社会がいかに多くの暴力によって振り回されているかに気づく必要がある。暴力とはただ単に二人、あるいは二つのグループが相対して戦っているだけではない。我々が自らの環境を扱うやり方にも暴力は存在しているのである。世界中で何百万トンもの殺虫剤が農業に使われている。その一つDDTは一九七〇年以來ノルウェーでは使用禁止になっている。地球をおおひ、生活すべての担い手である薄い地表を手荒に扱うのを野放しにしておくわけにはいかない。有毒な産業廃棄物の不用意な処理や森林破壊などの例も多くの国に見られる。資源不足と人口増加の中でこうした類の暴力は切実な脅威となっている。

ハーバード・マルクーゼが指摘しているように、一たん発明されたテクノロジは使い尽くされてしまう。様々な分野における破壊の方法が効果的になる

につれ、暴走の可能性と暴力の使用が増加する。

◇解放とスリル

力づくでも対処しなければならぬ相手がいるというと驚くかもしれないが、それは己れの心の奥底にひそむ攻撃性や破壊性に激しく対応しなければならぬときである。「どれほど人びとをいたわる社会が実現しても各人の中にある攻撃性を克服する仕事まで肩代わりすることはできない。」とドイツの心理分析学者アレキサンダー・ミッチェルリッヒは書いている。「自分内に在る破壊の欲望を現実として認めるとき、はじめて人は破壊性から解放される努力を始める。」

自由で気ままな社会は暴力へと続く大道である。「スリルはわれらが時代のアルファとオメガである。古いタブーを破り、新しいタブーも次つぎに克服する。『解放』と『スリル』は最終的には暴力にゆきつく。何故なら暴力こそがすべてのスリルが魅力が失ったときに突き当たる限界だからである」とシユテイ・メーレンは書いている。

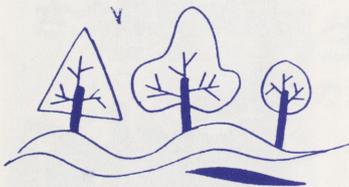
各自がそれぞれの人間性にひそむ下劣な欲望を断固として処理しないといくと、誰もが望ま

ない、制約された社会が実現する。道義の欠如は行き過ぎた法と秩序をもたらす。ルールの無い社会に生活する不安が昂じると、自らの役割が明確に義務づけられる牢獄の生活を自ら選ぶことになるからである。

「何故、世界は一つの大きな家族のように暮らせないのだろう」と新聞を読みながら父親がため息をついた。すると「家族のようにしているから問題があるのじゃないか」と息子が答えたという。

戦争や暴力は個々の我われがどうすることもできない大きな力のようにみえるものである。しかしわれわれ自身が問題の一部であることを知り、生活の中で具体的に対処し始めるとき新しい希望が生まれるのである。

(続く)



Jens-J. Wilhelmsen
Man and structures

原語版 (英語)

Man and Structures
(人と機構)

発売中

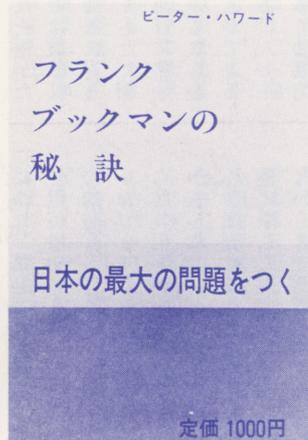
定価 550円



●今年のコーの産業人会議で日本やナイジェリアの参加者達と談笑する著者 (右端)

MRA 関係出版物案内

●ソ連の反体制派たちと愛と幸せの発見は当協会でもお取次いたします。TEL 03(821)3737



フランクブックマンの秘訣

ピーター・ハワード著／相馬雪香訳

ブックマン博士は共産世界も、非共産世界も、同じ点で失敗していると信じていた。すなわち、どちらも利己心から完全に自由な新しい型の人間をつくることのできないということである。しかも今日の原子力時代に世界が直面している非常な危険と大きな可能性にかんがみて、これからの世界の運営にはどうしてもそうした新しい型の人間が必要なのである。(本文より)

国際MRA日本協会 定価1,000円

ソ連の反体制派たち

—私が見た人権闘争—

ビクター・シュパラー／藤田幸久訳

私たちの信奉する民主主義という自由を基盤とした制度は、深奥の良心に従って自由に考え、行動する個人を必要としています。画一主義では駄目なのです。自由に考えることのできる個人、そうした民主主義者の欠如した民主主義は似而非なるもので、本物ではありません。(著者まえがきより)

サイマル出版会 定価1,200円



愛と幸せの発見

山崎房一

この世の中には二つのタイプの人間がいる。その一つは、大きな幸せの中に居ながら、その中の小さな不幸のみを見つめて、いつもブツブツ不幸せに生きている人間と、もう一つは、大きな不幸せの中に居ながら、その中の小さな幸せのみを見つめて、いつも幸せに生きている人間である。(本文13ページより)



PHD研究所 定価1,000円